

平成20年度資源評価票(ダイジェスト版)

東シナ海底魚類

キグチ		<i>Larimichthys polyactis</i>
シログチ		<i>Argyrosomus argentatus</i>
ハモ		<i>Muraenesox cinereus</i>
マナガツオ	マナガツオ	<i>Pampus argenteus</i>
オ類	コウライマナガツオ	<i>Pampus echinogaster</i>
エソ類	ワニエソ	<i>Saurida wanieso</i>
	トカゲエソ	<i>Saurida elongata</i>
	マエソ	<i>Saurida</i> sp.2 等
	クロエソ	<i>Saurida</i> sp.1
カレイ類	ムシガレイ	<i>Eopsetta grigorjewi</i>
	メイタガレイ	<i>Pleuronichthys cornutus</i>
	ナガレメイタガレイ	<i>Pleuronichthys</i> sp.



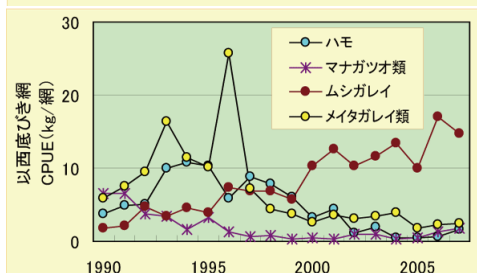
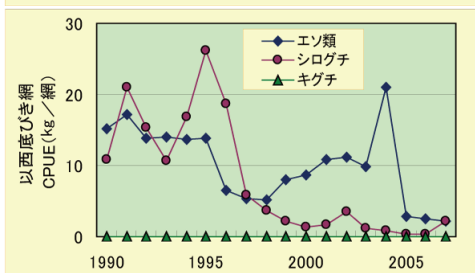
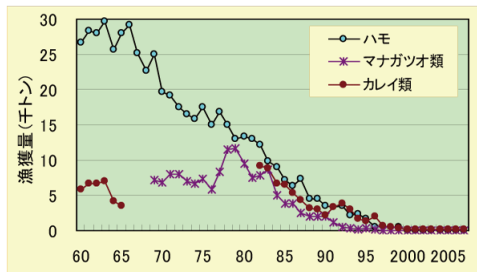
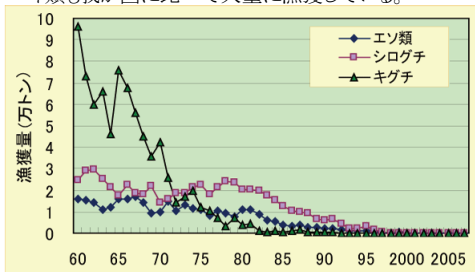
系群名 東シナ海
担当水研 西海区水産研究所

漁業の特徴

主に以西底びき網漁業によって漁獲される。かつての漁場は東シナ海・黄海の広域に及んでいたが、現在では我が国200海里内を中心としている。さらに2004年以降は夏季休漁の影響で、漁場が九州西方の東シナ海北部海域に集中した。主要対象種も大きく変化し、現在ではキダイ、イボダイ類、イカ類等が大きな割合を占め、グチ類やハモの占める割合は小さくなっている。

漁獲の動向

以西底びき網漁業は、1960年代には30万トン以上の漁獲量を維持していたが、1970年前後に急減し、1970年前半には漁獲量はおよそ20万トンとなった。その後、1980年頃までは漁獲量は20万トン程度で安定していたが、1980～1990年代では漸減し、2007年には約7千トンを漁獲するのみとなっている。中国は、底びき網によりキグチ、マナガツオ類とハモを多獲しており、いずれの魚種についても1990年代に漁獲量が著しく増加したが、近年の漁獲量はほぼ横ばいとなっている。韓国も2007年にはキグチとシログチを合わせて約36千トン漁獲しているほか、マナガツオ類、カレイ類も我が国に比べて大量に漁獲している。



資源評価法

東シナ海の陸棚縁辺部で着底トロール網を使った漁獲試験を行って現存量を調査するとともに、以西底びき網漁業の漁獲統計を解析し、2003年の操業漁区と同一漁区におけるCPUE (kg/網) から資源の変動傾向を検討した。但し2004年以降のCPUEについては、以西底びき網の漁場が著しく北偏していたため参考値に留めた。

資源状態

CPUEの長期的な変動傾向(1971～2007年、カレイ類は1982～2007年)からすべての資源の水準を低位と判断する。2003～2007年の5年間の傾向から、シログチは横ばい、ハモは横ばい、マナガツオ類は横ばい、エソ類は横ばい(近年の主漁獲対象種であるクロエソの資源量は安定しているため)、カレイ類は横ばいと判断する。キグチは近年ほとんど漁獲されておらず、現存量調査結果からも特定の傾向を判断するのは困難なので不明とする。

キグチ



シログチ



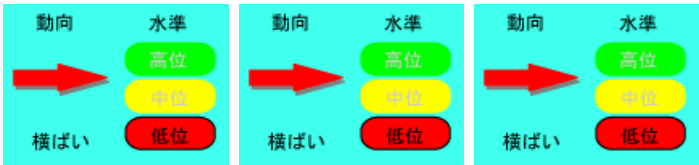
ハモ



マナガツオ類

エソ類

カレイ類



管理方策

近年の以西底びき網漁業の操業海域において、本報告で対象とする東シナ海底魚類に対する漁獲努力が、対象資源に与える影響はあまり大きくないと考えられるので、資源の増減傾向に合わせて漁獲することを資源管理目標とするのが妥当である。現状の漁獲努力の水準で漁獲を続ければ、多くの魚種について、資源の変動に付随して漁獲量が決まってくると考えられる。対象資源を管理するためには、関係各国の協力による東シナ海全域における資源管理が必要である。

資源評価のまとめ

- すべての資源が低位水準で、資源状態は良くない

管理方策のまとめ

- 問題の根本的解決には東シナ海全域での関係国間の協力が不可欠
- 我が国の漁業の現状の努力量が対象資源に与える影響はあまり大きくないと考えられる
- 資源の密度に応じた漁獲を続ける

資源評価は毎年更新されます。